



漢字が日本語をほろぼす

田中克彦著

株式会社 KADOKAWA 2011 (角川SSC新書)

文学部教授 鈴木 泰

学生諸君も、漢字の勉強にずいぶん苦勞したのではないかと想像される。その苦勞がむくいられて大学入学をはたしているわけだから、いまとなつては漢字は便利なものとかんがえているだろう。いまさら日本語をローマ字でかけといわれたりしたら、それこそ不便でしようがないとおもうだろう。だが、受験競争もおわつたいま、このへんで一歩たちどまってかんがえてみることもいいことだ。

日本語が英語のたすけをかりなくても、たいていの学問や仕事がこなせるということは漢字・漢語のおかげであることはたしかだ。しかし、私達は漢字だけで生活しているわけではなく、仮名のたすけもかりている。その最たるものが、ふり仮名(ルビ)である。ひとむかしまえは新聞の漢字にはすべてふり仮名がついていた。まだ仮名は発明されていなかったが、古事記を記録した太安万侶(おおのやすまろ)は、漢字でかくと思いが十分通じないが、仮名でかくと長たらしくなつてこまると

かいているが、千年以上たった現代でもそうしたジレンマは存在しているのではないか。現代日本語が必要に応じて総ルビになることがあることはそのジレンマが今も解消されていないことをしめしている。太安万侶は神話には漢字を、歌には仮名(万葉仮名)をもちい、漢字と仮名を場合にに応じてつかいわけている。表意的な漢字と表音的な仮名とを一つの行に窮屈におしこめる曲芸のようなことはやめて、仮名だけでかく文章や、漢字だけ(実際には漢字仮名まじり文)でかく文章があつてもよいのではないか。どっちをつかつても日本語であることはかわらないのだから。やたらとふり仮名のついた文章は、日本語ってなんて複雑なことばなのだろうとおもわせて、世界のひとを日本語から遠ざけることになるだけである。日本語をもっと世界にひらかれたことばにするためにこの本はかかっている。